

司馬遼太郎

翔ぶが如く
四

司馬遼太郎 翔ぶが如く 四

文藝春秋





翔ぶが如く 四

昭和五十一年四月十五日 第一刷

著者 司馬遼太郎し ば りょう た ろ う

発行者 檉原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話(東京)二六五—一二二番
郵便番号 一〇二

印刷所 大日本印刷
製本所 大 口 製 本

*万一、落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

壯士 7

肥後荒尾村 44

植木学校 68

明治八年・東京 79

浅草本願寺 108

島津左大臣 136

薩摩への使者 156

密偵 192

幻影
241

流説の巷
264

神風連
274

鹿兒島へ
302

装幀 栗屋 充

カバー写真・安行一式縄文土器部分（水戸・マロン美術館蔵）
鼎写真・隼人の盾（奈良国立文化財研究所蔵）

翔
ぶ
が
如
く
(四)

壮士

熊本県（白川県）士族宮崎八郎は、志願兵として台湾にある。瑯瑤山（ろうようざん）の急造の兵舎で他の壮士と一緒に毎日ごろごろしている。

かれらの隊は、主力をなしている正規の鎮台兵と区別するために、

「徴集隊」

と、よばれていた。

徴集隊のうち、圧倒的に多数なのは、鹿児島士族である。大久保と西郷従道が、征韓論の敗北で鬱屈している薩摩人の血を慰めるために隆盛の承諾を得て徴募した以上、鹿児島士族が多いのは当然といえるし、別の表現でいえば征台はかれらのみのおこなわれたというこ

とであろう。

戦闘そのものは小規模な演習程度のもので、あっけなく終わった。あとはマラリアやアミーバ赤痢との戦いだったといっている。ほとんどが罹患（りかん）し、病死する者が続出した。立って動いている者も肉がそげ落ちて、幽鬼のようだった。戦死十二人に対し、病死五百六十一人（総人数の七分ノ一以上）という数字が、この惨状を雄弁に物語っているであろう。

八郎もアミーバ赤痢（かみ）に罹（か）って一時病院に入った。病院といっても、小屋掛けにすぎない。ついでながら、鹿児島から英医ウィルスの弟子である若い医者が数人従軍してきているが、アミーバ赤痢やマラリアの治療（ちやう）に馴（な）れず、最初は当惑するのみで、あまり役に立たなかった。

もっとも、軍医たちのこの当惑は、やがて解消された。政府は、東京にいるドイツ人医師を御雇（おやとひ）として派遣してきたのである。シェーンベルゲルという人物で、明治七年六月十二日付で契約し、給料は一月五百ドル、ほかに蕃地（ばんち）手当が百五十ドルという高額なものだった。政

府はかれに、現地の日本人医員に対する指揮権をあたえた。

宮崎八郎はほどなく癒えて、徴集隊の本営付になった。かれは熊本隊の数人の幹部のひとりだった。ただし、勤務というようなものはない。

毎日、隊員と車座になって酒を飲んでいただけである。「大久保は一体北京で何をしているのか」

という言葉が、毎日、たれかの口から出た。大久保についての全員のきまりきった感想は、かれが、弱腰で臆病者で、ひたすらに戦争の拡大を怖れているということだった。

壮士たちは、戦争の拡大を欲している。

瑯瑤山における日本軍駐留の景観は、一見、かれらは高砂族ではないかと見まがうような感じもある。

兵站は大倉喜八郎という業者が請負っていることはすでに触れた。大倉の配下の人夫は、軍人でも軍属でもなく、また国家が責任をもって徴用したという身分でもない。大倉組人夫というにすぎない。かれらが小屋掛けし

て暑氣と雨露を凌いでいるさまは、飯場の光景とかわらず、裸体でもってふざけながら歩いているさまは、高砂族に似ている。ただ高砂族が気品に富んでいるのに対し、野卑なだけであった。

正規の鎮台兵はさすがに規律正しかったが、士族隊（徴集隊）は、無秩序で、暴慢で、集団としての規律というものはほとんど見られない。そのくせ、鎮台兵を見くだしており、たとえばかれら徴集隊の者が、

「チンダイ」

と発音するときには、言いがたい侮辱をこめていた。

徴集隊も、鎮台兵とおなじ軍服を着ていたから一見区別がつかないのだが、ただ馴れぬ洋服が窮屈なために裸体でいることが多い。裸体でいるのは、徴集隊の隊員とみてほぼ間違いなかった。このことは、この付近に居住する清国人の印象を悪くした。清国人は日常、よほど下層の労働者でないかぎり決して裸体を見せない。かれらはじめて見た日本人に、理窟ぬきの嫌悪を感じたのは、こういうところにも一因があるであろう。

「かれらは勇敢である。しかし一定の規律の中に閉じて

めておくことが不可能なひとびとである」

と、ニューヨーク・ヘラルドの特派員であるハウスが、書いている。米国人ハウスは日本人についてもこんどの征台についても好意的であつた。それでもなおこのように書かざるをえない状況があつた。

ハウスは、この原因を、日本軍が部分的に西洋式をとり入れたことのマイナス面であらうと見ている。ハウスは旧幕時代の武士の礼儀正しさを知っており、おそらく旧日本式の軍隊のほうかはるかに整然としていたのではないかと見、それらの良さが、西洋式を部分的に入れることによつてすべて喪^{うしな}われたのではないかと見る。

徴集隊があまり規律的でなかったにもかかわらず、一応上部の監督に服すところがあり、大きく乱れるところが多かつたことについては、ハウスは興味ある見方をする。

「それは將軍(西郷従道)の徳化^(インフルエンス)によるものだろう」

と。この傾向は、薩摩士族において濃厚であつたであらう。この征台においては、薩摩人にとって従道は、薩摩弁でいう「オセンシ」であつた。オセンシ(お先師・先

輩)の言うことには文句なしに服する、という薩摩の伝統的士風が、軍隊規律の代用物として生きているのである。

この時期、瑯瑤山の兵營において宮崎八郎が作つた詩がある。

詩は征台を詠む。その戦闘と戦勝が、壮士としての八郎の日ごろの鬱懷を大いに晴らしたということであるらしい。

彈丸如雨將裂山

壯士此時心快絶

大笑仰天忽一声

腰刀染得妖夷血

彈丸雨の如く將に山を裂かんとす

壯士此の時心快絶

大笑天を仰いで忽ち一声

腰刀染め得たり妖夷の血

というものが、八郎にしては詩心よりも壮心が立ち勝りすぎる作品というべきで、しかもその壮心も知的には幼稚すぎる。

弾丸が雨のように山が裂けそうだ、というのは実際の戦闘からみればいかばかりの誇張だが、漢詩的気分というのは、多くの場合、こうしたものであろう。

「壮士此の時、心快絶」という感情は、幕末より続いてきた攘夷気分という伝統的鬱懷を背景として理解すべきものかもしれない。この共通の鬱懷が、かつて幕末において幕府をゆるがし、争乱をおこさせ、ついには明治維新の主因になったが、しかしながら世が変わって一部の志士が東京で高官になり、かれらはいち早く開明化して、野に満ちた鬱懷を置き去りにしてしまった。その晴らされることのない野の鬱懷が、鬱勃とたぎって、いまは反政府運動のエネルギーの一つになっているのだが、八郎のこの詩は、在野の共通した精神状況の一面を露骨なほどの正直さであらわしているというべきであらう。近代の革命運動につきものの大理念というものは、ここには

ない。

「腰刀染め得たり妖夷の血」

という妖夷は、高砂族のことである。

幕末の憂國的知識人がしきりに口にした妖夷というのは、欧米の先進国のことであった。かれらを妖夷とよんだイメージは、ひとつには水戸學と国学が生んだ日本聖地思想からみて、通商を強要するかれらに対し、神州を汚す者どもとしてとらえたからであらうし、さらに強大な産業技術の文明とその所産の軍隊を持つ欧米人に対し、及びがたいながら刀剣で対抗しようとする悲壯感から出た美学的表現だったろうが、しかし台湾の高砂族をもつて「妖夷」とするのは、やや滑稽の感をまねがれない。が、八郎はユーモアとしてこの詩を作ったのでなく、大まじめであった。さらには八郎をもって代表とする多くの壮士も、この詩で象徴される気分でもってこの療癘の地の兵營で起居していた。

宮崎八郎はのちに強烈なルソーの徒になるのだが、しかしこの時期のかれは、年少客氣の侵略主義者であると

いえるかもしれない。

が、当の八郎にすれば、それは大いにちがうと言うであらう。しかし単なる侵略主義とどこが違うかということとを明快にする思想も論理も持たなかった。八郎だけでなく、日本の明治維新そのものが、人類が共有すべき普遍的な思想を抛りどころにして成立したのではなかった。

維新の成立は、外圧による。まわりが海である日本は、ちやうど沙漠の真っ只中にある都市国家に似ている。それを、敵が包囲した。敵は欧米勢力という巨大なもので、ひたひたと城壁のそとをかこんだとき、市民に防衛上の大緊張（攘夷熱）が生まれ、これによって防衛の担当能力を欠いた幕府が倒された。代わって太政官政府が成立した。

要するに、この革命は、外圧を撥ねかえそうとするきわめて武断的なエネルギーによって成立したものであった。ただし、革命分子のなかには、それだけでないさまざまな思想のもちぬしはいた。しかしながら旧国家をくつがえしてしまったエネルギーそのものは、多分に武の要素がつよかったといっている。

たとえば幕末の志士たちが好んだ水戸の藤田東湖の詩が、この時代の攘夷気分の象徴的なものであったであろう。東湖は重厚な学殖でもって世人から尊敬されていたが、尊敬されている自分を十分計量した上で、華麗な煽動をおこなう。かれの数多くの攘夷の詩は、虹のように華麗な煽動の歌である。

ついでながら幕末の一時期の幕府になつた老中阿部正弘は慎重な開明家であつたが、藤田東湖をきらい、東湖が会いにきたとき、東湖が意見をいう前にその出鼻をくじくように、

「足下のような賢者が、言うべくして実行もできぬ説のみを吐くのか」

といい、東湖を怒らせた。

たしかに東湖の詩には、「宝刀染め難し洋夷の血」とか「百万の夷蛮、一槍に付す」とか、「三尺の竜泉（日本刀のこと）光芒長し……豈洋夷をして陸梁するを得しめんや」といったたぐいの詩句にみられるように、日本刀を抜けば世界の洋夷は斬られてしまうのだ、という客気のみのものが多い。

この氣分を、開明化した新政府が継承しないというところで、新政府は在野勢力から憎惡された。八郎は高砂族を現実的に「妖夷」だと思ったのでなく、東湖的な攘夷氣分を高砂族に仮託しただけであり、ひるがえっていえば、かれの海外伸張氣分も現実的な侵略主義とは陰翳を異にし、多分に詩中の氣分であつたろう。

宮崎八郎が、この時期ほど濃厚に薩摩人に接したことはない。

正直なところ、教養の点では一般に白川県士族のほうがはるかに高く、鹿児島県士族は粗野であつた。その理由は、単に旧幕時代の兩藩の方針の相違による。肥後藩細川家は學問に熱心で、その影響は八郎のような郷士身分や大百姓階級にまで及んでいたが、薩摩藩島津家のばあいは學問に不熱心でないにせよ、戦国以来の伝統の士風により、古格な士心の旺盛であることを第一に尊び、學問の上下や有無をもって人間を量ることを一切しない。人柄の單純明快さを美德とし、卑怯を何よりも惡徳とし、死につながる行動をする場合、わずかに躊躇（ちゅうちよ）してもそれ

を臆病としてはげしく卑しむ。

——ぎ（議？）を言うな。

というのはかれらが少年のころから兩親や郷中（少年組織）から薰陶（くんたう）される教育で、武士が自分の行動の言いわけをすることはもつとも恥とされた。

ところが熊本の場合は、およそ逆であつた。

「肥後人の理窟好き」

というのは天下に知られた通癖で、肥後人が十人集まれば十人とも意見が違ふといわれ、それぞれが他人の意見との小さな差を重大なものとし、その小差に固執する。そのために大事をなすときに決断が遅れ、行動が時機を失し、とくに集團として行動することが困難であつた。

肥後が、幕末において藩論がまともならず、ついに維新においていわばなす所がなかったのはこの氣質による、ということをも、それを嘆く肥後人（八郎もそうだが）たちは常に言つて自戒した。八郎はこの暑い土地で多数の鹿児島県士族と生活をともにして、

（なるほど、話できくとおりだ）

と、肥後人とかれらの氣風のちがいの大きさに目を見

はる思いをすることが多い。

酒を飲むときなど、八郎たち肥後人は議論の多い肥後氣質^{かたぎ}を憎みつつも、しかし議論を肴^{さかな}にしなければ酒がすすまぬ感じなのだが、薩摩人たちはただ陽気に飲み、陽気に酔い、およそ理窟^{りく}っぽい話を酒座でやらないのである。

理窟のかわりに、人名を用いた。問題を論ぜねばならぬときも、問題を人名で象徴させた。

「大久保はよくない」

と、かれらがしきりにいう。なぜよくないかは一切いわず、政府のやることのすべてが「大久保」という人名になっているのである。

これとは逆に、反政府のすべての問題は西郷という人名に象徴され、よき世の中への期待や願望もすべて西郷という人名に集約される。八郎からみれば、この点がおもしろかったし、かれにとって西郷が未知の人だけにやばかばかしくもあった。

ともかくも、徴集隊の若い薩摩人たちの一特徴は、大

久保を呼びすてにすることであった。

これに不審を感じた八郎が、徴集隊の若い幹部の一人に、

「薩摩人は長幼の序を重んずるときいていたが、なぜ大久保参議を呼びすてにするのか」

と、問うたことがある。

答えは、

「長幼の序を重んずるがためである」

という奇妙なものだった。なぜか、とさらにきくと、東京の近衛の将官や佐官たちが官をなげ打って帰郷した、われわれはそのひと達をオセンシとして尊んでいる、そのひと達が久保参議を大久保とか一蔵とかといって呼びすてにするからわれわれもそのようにしている、つまり長幼の序を尊んでいるのである、という。

西郷については、かれらは単に先生とよぶ。

なぜ徴集隊に参加して台湾にきたのか、と問うと、自分自身の理窟や気持は言わず、「先生」が行けといわれたからだ、という。肥後では考えられぬ現象である。かといって薩摩人に自分一個の意見がないのかといえそ

うでなく、ただかれらは自分の意見をあげつらうよりも、西郷という稀有なほどに卓越した人物を推戴し、私心なくそれに徇うほうが、人間としてより崇高な行動に参加できるということを信じて疑わない。たしかに、かれらは西郷についてはほとんど信仰に近い気持をもっている。しかしそれ以前に、卓れた者に徇うという気分をかれらが伝統の風土として持っているようでもあり、たまたまその気分にもっともふさわしい人物として西郷をかれらは得たということでもあるのだろうか。

八郎はそのように観察したが、かれは自分でも奇妙なほど西郷に関心がなかった。

それほど薩摩人が尊崇する人物なら自分も会ってみたいと思うのが青年らしい好奇心といってよいのだが、八郎は人並み以上に好奇心がつよいとはいえず、むしろ、薩摩人たちが西郷を讃仰すればするほど、西郷を冷笑したい気持を禁じ得ない。

(すでに、旧物ではないか)

と、心中、嘲笑したい思いでもある。

この時期の八郎は征韓論の徒であり、多分に詩的気分

とはいえ海外伸張論者であり、意見としては西郷とかわらない。かといってわざわざ西郷のもとに参趨しその前に跪き、その意見を拝聴するより、むしろ西郷に自分の意見をきかせたいという気分の徒であり、要するに八郎には薩摩人のように人に徇うという気分がまるでなかった。

徴集隊における宮崎八郎の待遇は、軍曹である。軍曹という下士官の階級は、のちに軍隊制度が整備されてからは、歩兵なら十数人の長ということになるが、この当時は、規定がなおあいまいである。

「日清のあいだに戦争がおこるだろう」

と、八郎はおもった。

この推測にはべつに重要な材料はない。ただ北京における大久保の談判がひどく難渋している。この報が伝わって、八郎はかならず戦争になると見た。というよりも日本は戦争をせねばならぬと思った。どの国が相手というのでなく、この思いはやみくもなもので、徴集隊に参加している鹿児島県士族も、八郎のような熊本人も、み